

Title	『藤永』のアイ : 『観世流仕舞付』の記事をめぐって
Author(s)	伊吹, 美保子
Citation	演劇学論叢. 2000, 3, p. 122-128
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/97576">https://doi.org/10.18910/97576</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『藤永』のアイ

— 『観世流仕舞付』の記事をめぐって —

はじめに

《藤永》<sup>1</sup>は観世流を除く宝生・金春・金剛・喜多流の四流で現在演じられる曲であり、『申楽談儀』の中にも次のように曲名が見える。日本思想大系『世阿弥 禅竹』（表章編、岩波書店刊）によつて該当部分をあげておく。

松風に、「寄せては返る片男波、昔辺の鶴こそは立騒げ、四方の嵐も音添へて、夜寒何と過ごさん」など、面白節なれ共、はや第二に落つ。（中略）此論義、昔の藤栄の論義也。音曲苦みぶるやう成こと、其癖々の面白也。

この記事から《藤永》は世阿弥の時代から既に上演曲として成立していたこと、また、世阿弥時代の《藤永》は既にそれ以前とは異なつた形であつたことは既に指摘されているが、現在の形にたどりつくまでの変遷は現存テキスト

伊 吹 美保子

から推察するほかない。現存する《藤永》の最も古いテキストは野坂家蔵の金春禅鳳本八郎本転写三番綴本をはじめ、松井文庫蔵の淵田虎頼等節付本（淵田本）、同文庫蔵妙庵玄又手沢五番綴本（妙庵本）など室町末期筆の謡本のみである。それらの古写本の謡本及び現行の謡本との間にも若干の差異はあるが、おおよその内容を妙庵本に沿つて段ごとに示す。

- 1、最明寺時頼（ワキ）とワキツレが登場。
- 2、ワキ、ワキツレが摂津国芦屋で一夜の宿を借りる。
- 3、ワキは伯父の藤永（シテ）に領地を横領されて零落している月若（子方）の事情を聞き、助けることになる。
- 4、藤永（シテ）、太刀持（アイ）を従えて登場し、浦遊びへ出る。
- 5、鳴尾（ツレ）、立衆（ツレ）と能力（アイ）と共に登場し、小歌を謡う。
- 6、鳴尾と藤永が酒宴に興じ、能力は小舞を舞い、藤永は

男舞を舞う。

7、藤永が船の縁起の曲舞を舞う。

8、最明寺が能力と問答し、さらに藤永に舞を所望する。

9、藤永が鞆鼓を舞う。

10、藤永が扇で顔を隠していた時頼に扇をとれと詰め寄る。

最明寺は正体を明かし、藤永に月若の所領を返還させ、

さらに藤永の罪を不問として一族の繁栄を囃らせる。

11、結末。

主眼はシテの藤永が見せる船の縁起の曲舞や鞆鼓であるが、芸尽くし物の能でありながら芸尽くしを行うシテが悪人という珍しい設定の能である。詞章は他の能と共通する部分がかかなり多く、様々の能から寄せ集めて作られた雰囲気<sup>3</sup>の濃い作品であるといえよう。

### 一 鳴尾の従者について

現存する《藤永》のテキスト中には二人のアイが登場する。一人はシテ・藤永の従者（太刀持）、もう一人はツレ・鳴尾の従者（能力）とする。どちらも劇中の進行に関わる「アシライアイ」と呼ばれる間狂言である。室町時代の古写本でも現行の謡本であっても、通常、謡本の中で間狂言については舞台進行上必要な箇所が最小限記されるだ

けで、《藤永》のようにアイが劇中大きな役割を果たす曲であってもそのセリフや役名は省略されることがほとんどである。たとえば比較の間狂言について詳述される妙庵本や淵田本においても《藤永》のアイは藤永の従者の役も鳴尾の従者の役もどちらも「ヲカシ」とするだけで、それ以上の記述はない。ところが、鳴尾の従者については岡家蔵『観世流仕舞付』で次のように具体的な説明がなされている。

シテ折えほし、直垂ノ上うしろはなす。大口少花やかに出立也。刀さす。扇持。太刀持、狂言者也。（中略）扱、下りは二てなるを出る。ゑほし・直垂・大口・もしハ上下ノ上にも。供、上下着、忝人。又、かいあみ出る。（中略）「藤永殿へ酒をすゝめ候へ」となるを云時かいあみ酌する。頓て「かいあみ一ツ舞候へ」と云。「畏た」と云て、「一天四海波」をまふて、「此扇をは藤永殿へさし申」と云て引こみ、笛吹ノ所へ行、る。又なるを「かいあみ其扇を藤永殿へさせ」とも云也。

このように「観世流仕舞付」では鳴尾の従者を「かいあみ」と固有の名称で呼んでいる。他の間狂言本を検証すると、『観世流仕舞付』以前の内容とみられる「能間・作物作法」<sup>4</sup>では次のように記す。

後とうゑいのともにきやうけん出ル。とうゑいと狂言、少せりふあり。さて、さかりはにてなるを出ル。さかりは過て、とうゑいのともと、なるおの方のきやうけんとせりふあり。さかもりあり。なるをの方の狂言一さしまふて、とうゑいへあふきをさす。

ここではアイの役名を記さず、また大蔵流の江戸初期の間狂言資料である『貞享松井本』（法政大学能楽研究所蔵）でも特定の役名は記さない。比較的古い演出資料で間狂言について詳しく言及するものは非常に少なく、その中からアイの型について触れたものを探せば『福王流古型付』<sup>5</sup>があるが、ここでも単に「狂言」と記している。管見に入った資料で鳴尾の従者の役名を「能力」と記す初例は大蔵虎清による寛永十六年筆の『間・風流伝書』<sup>6</sup>で、次のように説明する。

後のあいしらい、のふりに出立なり。なるわうとの、ともをして、おなしやうにさ、のはをかたけて立衆おなしことくにうたうて出て、たかひにりやうはう入ちかへ、とうとある時、のふりきはつ、みうちの前になをる。

鳴尾の従者を「能力」と呼ぶ例はこの虎清本が最初なのであるが、「能力」が元の形であったとは考えにくい。その理由として、能力というのが「寺の下働きをする男」を

意味する言葉であり、武士である鳴尾に付き従うのが寺院関係者である必要はないと思われるからである。また、藤永の従者である「太刀持」と区別するためだけに「能力」としただけは考えにくい。

「かいあみ」とはどのような性格を持った役であったのであろうか。実は「かいあみ」という名前は、『観世流仕舞付』にだけ見られるのではない。「かいあみ」なる名は狂言《若菜》の和泉流の諸本においても見られる固有名詞なのである。

《若菜》は『天正狂言本』にも見える古くから成立していた狂言で、和泉流の諸本に沿って内容を説明すると、八瀬・大原に小鳥を狙いに出た大名と「かいあみ」が若菜を摘む大原女たちと出会い、酒宴に誘い、互いに舞謡つて楽しい時を過ごすという内容である。（「かいあみ」の名を除けば、『天正狂言本』、大蔵流・鷲流共におおよそのあらずじは和泉流と同じである。）まずは『天理本狂言六義』<sup>7</sup>によって《若菜》の冒頭の部分をあげる。

大名一人出て、「面白春じや」と云、「野あそびに行」と云て、かいあみをよび出す、かい出る、右の通云て「野遊ひに行」と云、かい「よう御ざらう」と云、「何方へ行かうぞ」と云、シカ／＼、かい「八瀬、小原がよう御ざらう」と云、「おもしろい所か」と云、かい「今

時分は女共が大ぜい小原木と申物をいたゞきつれて京へ出るが、小うたなどをうたふておもしろい」と云。

大藏流、鷲流の諸本では単に「下人」とする役であるが、和泉流では「かい阿彌」（『天理本狂言六義』では「海阿み」とも表記する）なる固有の名がつけられている。役名は異なれど大名の下人のような役割であることにかわりはないが、よりその役割を明示しているのが三宅庄一手沢本（『狂言集成』<sup>8</sup>）収載）である。その冒頭部分をあげると、

アド「大果報の者で御座る。いつもとは申しながら。当年の様などかな春は御座らぬ。今日は童坊のかい

阿彌を召連れ。野邊へ小鳥を狙ひに出でうと存ずる。

（中略）シテ「畏まつて御座る。やい〜。今日は頼うだお方が野遊びに出でうと仰せらるゝ。下部の衆は竹筒の用意をして。見え隠れにお供さしませ。申附けて御座る。アド「小鳥を狙ふ刺竿を持って。シテ「畏まつて御座る。太鼓座よりアド「さあ〜来い。シカ〜。誠に。持つて出る。

童坊も多い中に。汝は譜代の者ぢやに依つて。いつも心安う供を言附くる。随分奉公を大事に掛けい。髪を生やして歴々の侍に取立てうぞ。

と、このように「かいあみ」を「かい阿彌」とし、はつきりと「同朋衆」として位置づけている。確かに阿彌号を持つところを見ると、「かいあみ」はただの下人ではなく、

同朋衆である可能性は十分であろう。ところで、『若菜』に見える「かいあみ」については早く林屋辰三郎氏が『中世芸能史の研究』<sup>9</sup>の中でこの『狂言集成』の『若菜』の本文を引用し、次のように述べている。

ここで同朋衆のかい阿彌は、すべての同朋衆に通ずるとはいえないにしても、野邊に小鳥を追う餌取にも長じていたこと、そして阿彌號をもち時宗の徒であることはやがて髪をはやして歴々の侍に取り立てられるという身分向上の前提でしかなかったことが、きわめてあざやかに描破される。

鳴尾の従者が能力ではなく、本来『観世流仕舞付』が示すように僧体である同朋衆のような役である方がよりふさわしいと言えよう。和泉流の『若菜』に見られる「かいあみ」のような同朋衆的な者が鳴尾の従者として『藤永』に登場する形が本来であつたのではないだろうか。それが僧体であるところから、時代が下るに従つて固有の名前が失われ、間狂言の役名の類型化の中で「能力」に変化したのである。固有の名前を持つ間狂言の役というのはあまり例がなく、現行曲で言えば数例に過ぎない。<sup>10</sup>『観世流仕舞付』を概観しても、固有の名前をつけられているアイは他に見えず、『藤永』の例が特殊と言えるかもしれない。しかし、「かいあみ一ツ舞候へ」や「かいあみ其扇を藤永殿へさせ」

と先述したとおり、『観世流仕舞付』が引用する詞章の中で「かいあみ」の名をあげていることから、決して『観世流仕舞付』の編者の思いこみなどではなく、そのようなセリフを実際に目にしていたのであろう。

## 二 アイの小舞

曲中で鳴尾の従者（能力）は登場後すぐに鳴尾の求めに応じて小舞（型付によって曲は異なる）<sup>11</sup>を舞う。さらに、船の起源の曲舞をシテが舞った後、アイがさらに一番舞を舞ったことが『観世流仕舞付』の次の記事からうかがえる。

「よし野たつたの花」を云、さつとたつはひノ三段ノ舞也。曲舞其ま、まふ。替事なし。「此御代方おこれり」と云時かいあみ出て、「我等も君ノおからかさを良鳥（マド）けきしうにもたせて」と云てまふ。（中略）狂言とうなつく時、見付てあいさつ如常。又、鷲仁右衛門ハ右ノ謡ノ次に「又いたぬけしたる物あり」とまふたる也。

二番の舞を舞う例はさらに古くから見られ、前出の神宮文庫蔵『能間・作物作法』でも次のように見える。

さかりは過て、とうゑいのともと、なるおの方のきやうけんとせりふあり。さかもりあり。なるをの方の狂

言一さしまふて、とうゑいへあふきをさす。さてくせまい過、又きやうけん少まふ。

このように鳴尾の従者が合計二番の小舞を能の中で舞うのであれば次のように芸尽くしが展開される。

鳴尾他（小歌）―従者（小舞）―藤永（男舞）―藤永（船の縁起の曲舞）―従者（小舞）―藤永（鞆鼓）

この形の方が藤永と鳴尾側の双方で舞を見せあう感が強い。シテ一人の芸尽くしではなく、アイの見せる芸も能の中での見せ場の一つであったであろう。やはりアイは「能力」ではなく、一芸のある同朋衆のような存在であった可能性が高いと考えられよう。

おわりに―《藤永》と《若菜》

ところで、なぜ全く《藤永》と接点がないと思われる狂言《若菜》に同じ「かいあみ」という名が見られるのである。憶測の域を全く出ないが、最後に簡単な推論を述べてみたい。

能《藤永》と狂言《若菜》には共通した要素がある。それは、大名が野外へ遊びに出て酒宴に興じ、そこで互いに舞を舞ったり謡ったりするという趣向である。《藤永》の場合は前後に月若の所領問題が配置されるが、見せ場とな

るのはシテ・藤永の芸尽くしであることは間違いない。しかも、芸を見せるのは藤永だけでなく、鳴尾の従者も小舞を見せる趣向になっている。先に述べたように、古くは鳴尾の従者と藤永が交互に舞を舞うような形であったようである。また、《藤永》で登場する鳴尾の立衆（シテツレ）は笹を持ち、揃って複数名（演出資料によってばらつきがあるが、二、三名から多い場合は七名程）が下り端にのつて登場するのであるが、この形も《若菜》における立衆の大原女の登場を連想させる。

《藤永》も《若菜》も上演記録の初出はいずれも天文年間（《藤永》は天文元年、《若菜》は天文五年）であり、どちらが先に現在の形として成立していたかは不明である。特に、《藤永》は最初に述べたように、世阿弥以前の《藤永》から、現存の《藤永》に到るまでかなりの変遷があったと考えられる。その変遷の過程での《藤永》が《若菜》の成立になんらかの影響があったと考えることは出来ないだろう。《藤永》も《若菜》も類曲を見ない特殊な作品と言えるだけに、その成立に関わる共通したものが見いだせるかもしれない。

以上、《藤永》のアイに関する問題点を『観世流仕舞付』の記事から拾ってみたが、なにごん間狂言に関する資料は少なく、古い演出形態を推測することは難しい。それだけ

に『観世流仕舞付』の記事は断片的ながらも古い間狂言、特に記録されることの少ないアシライアイについての情報を与えてくれる貴重なものと言えよう。

#### 注

(1) 《藤永》は《藤栄》とも表記するが、本稿では原則として室町末期の鈔写謡本（野坂家蔵）『金春禅鳳本八郎本転写三番綴謡本』、松井文庫蔵『淵田虎頼等節付本』、『妙庵玄又手沢五番綴謡本』、鴻山文庫蔵『小宮山藤右衛門元政本』等）や現行金春流・金剛流・喜多流で採用されている《藤永》の表記を採用した。

(2) 「観阿弥時代の能」竹本幹夫氏（『文学』昭和五十八年七月号）など。

(3) サシ・上ゲ歌・下ゲ歌は《忠度》、クセは《自然居士》等。詳しくは「《藤栄》考―現存詞章と『昔の藤栄の論義』をめぐって―」樹下文隆氏（『広島女子大国文』十五号）参照。

(4) 「能間・作物作法―神宮文庫本間狂言等資料―」伊藤正義氏（大阪市立大学『文学史研究』十九号）の翻刻によった。

(5) 『福王流古伝書集成』（伊藤正義編、和泉書院刊 平成五年）所収。

(6) 鴻山文庫蔵。

(7) 『天理本狂言六義』下（北川忠彦他編、三弥井書店刊 平成七年）によった。

(8) 野々村戒三・安藤常次郎編、春陽堂刊 昭和六年。

(9) 岩波書店刊、昭和三十五年。第四章「中世藝能座の成立」参照。

(10) 小林實氏「間狂言の発想―その役柄に関連して―」(『国文学』昭和五十三年六月号)によれば、《蟬丸》の博雅三位、《小袖曾我》の春日局、《初雪》の侍女夕霧、《夜討曾我》の大藤内など、例はわずかである。

(11) 『観世流仕舞付』『間・風流伝書』では「一天四海波」、無刊記本「整版間の本」(「翻刻古版本 間狂言」田中允氏、『青山語文』三)では「京みやげ」を舞うとする。

〔付記〕

本稿を成すにあたり、貴重な資料の閲覧を許可下さった法政大学能楽研究所をはじめ諸研究機関に御礼申し上げます。